

【セッション 2】 ライフワーク分科会 Part1 A 会場

「マラリア対策で世界を変える」

講師： 狩野 繁之

【要旨】

マラリアという病気を知っていますか？世界の熱帯地域で、年間50万人もの命を奪っている感染症です。この地球規模課題の解決のためには、医学だけでなく、貧困がもたらす社会経済学的な格差の問題にも取り組まねばなりません。私は今、ラオスというアジアの最貧国で、同国保健省・パスツール研究所と共同研究を行いながら、その制圧に取り組んでいます。Think and act globally! 私の座右の銘です。学生諸君、未来の世界を変えたいと思わない…？

【講師プロフィール】 狩野 繁之 (かのう しげゆき)

昭和61年 群馬大学医学部卒業

学生時代は、空手道部・主将も務め強かった?! 書道部に所属・今も書道は趣味で続けている。英語、イタリア語、ラテン語、ポルトガル語、韓国語の習得に挑戦(どれもfluentにはならず!) 山登り、ほぼ毎日の家庭教師、女房となる彼女とのデート(これもほぼ毎日)……教会の日曜学校の手伝いなどもちょっとしたか??? 本分を忘れて課外活動に多くの時間を割いていた。また、文化人類学のフィールドワーク(ミクロネシア)やハンセン病対策研修(韓国・カトリック医師会関連)で、熱帯・亜熱帯の環境に学生時代に触れたことが、いまの国際保健分野を志したきっかけとなっている。

平成3年 群馬大学大学院医学研究科博士課程(寄生虫学専攻)修了

ここで、鈴木守教授(当時)に師事してマラリア学を修める。スーダンやブラジル・アマゾンのマラリア対策研究に関わり、ライフワークとする決心を固める。

平成3年 群馬大学医学部寄生虫学教室(助手~講師~助教授)

目標に向かって研究費の申請準備をしたり、論文を書き上げているときに喜びを感じる様になっていった。また、学生教育にも情熱を憶えた時期であった。

平成10年 国立国際医療研究センター研究所熱帯医学・マラリア研究部部長((現在に至る)

橋本龍太郎首相(当時)の「世界寄生虫対策イニシアチブ」達成に貢献するために、東京に単身赴任して(今は家族同居)政策医療に携わった。その後も、国を代表して世界のマラリア対策にかかわるダイナミズムにやりがいを感じている。

(その他併任/現職)

平成11~筑波大学連携大学院人間総合科学研究科	教授
平成21~東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学	講師
平成23~群馬大学大学院医学保健学研究科	講師
平成26~ラオス国立パスツール研究所寄生虫学研究室	Laboratory Head
平成27~フィリピン大学公衆衛生学校寄生虫学教室	Visiting Professor
平成28~長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科	客員教授
平成28~認定NPO法人 Malaria No More Japan	理事
平成29~Global Fund 技術審査委員会	委員
平成29~帯広畜産大学原虫病研究センター	客員教授

【セッション 2】 ライフワーク分科会 Part2 B 会場

「手を差し伸べて、その人に触れること」

講師： 中東 加保梨

【要旨】

私たちの看護はキリスト教の歴史の中にある

古来より看護は、家庭の中で家族によって行われてきた。この看護を家庭の外に出して、今日に続く社会的な看護組織を作ったのは初代キリスト教会の人々である。もちろん、日本の仏教における四箇院のように、キリスト教以外でも看護活動は行われていた。しかし、歴史とは続いていなければ意味がない。現在、私たちが行なっている看護は、他の宗教や文明ではなく、キリスト教の文化から生まれ、発展した看護である。「深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ」(マルコ 1:41)、「わたしが飢えたときに食べさせ、(中略)病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ」(マタイ 25:35-36)という言葉は、私たちの看護の原点といえる。

キリスト教において、祈りはすべての源だが、隣人愛は実践されてこそ意味がある。学生時代、事あるごとに「看護は実践の科学である」と教えられた。看護は精神論ではなく、実践されるところに意味がある。自分の技術を愛の実践に活かすことができるのが、看護の魅力である。

看護師として

当時、私は小さなキリスト教系病院で管理栄養士として働いていた。「『患者の隣にキリストがおられる』とはどういう意味なのか」、「クリスチャン医療者とはどういうものなのか」と興味が湧き、教会に通い始めた。やがて、私の手を神様に使っていただきたい、直接患者さんに触れて奉仕したいという思いが強くなり、看護師になる決心をした。

ところが、いざ洗礼を受けるとなると決心がつかず、教会からも遠のいていた。しかし、実習先病院で、入院中の司祭が祈る姿を見て、「神からは逃れられない。どこまでも私を迎えに来る」と観念し、受洗した。この時に、宣教(神の愛を伝えること)とは声高に神の愛を叫ぶのではなく、静かに祈る姿だけでも十分であると悟った。

看護の現場にいと、前述の「深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ(る)」というキリストの姿を思い出す。聖書には、病気の人を癒す多くの奇跡物語が記されている。深く憐れみ、手を差し伸べて下さるのは神である。その先の、その人に触れるという行為は私たちに委ねられている。障害児者は天使だという言葉をよく耳にするが、彼らは天使ではなく、どこまでも私たちと同じ人間である。しかし、彼らのそばには、たくさんのお天使がついていて、彼らはたくさんのお天使たちとともに生きていると思うことがある。私たちが人に触れる時、たとえ奇跡が起こらなくとも天使が微笑んでくれていますように。そういう看護をしていきたいと願っている。

【講師プロフィール】 中東 加保梨 (なかひがし かおり)

管理栄養士として勤務の後、聖母大学(現上智大)に入学。聖母大在学中に、徳田教会で受洗(2011年)。2014年より都立北療育医療センターで看護師として勤務。

【セッション2】ライフワーク分科会 Part2 C会場

「共に歩む～医療ソーシャルワーカーの視点を通して～」

講師：漆原 めぐみ

【要旨】

私は現在、修道会の使徒職として病院の地域医療連携室に派遣され、医療ソーシャルワーカーという仕事に従事している。

医療ソーシャルワーカー(Medical Social Worker=MSW)とは、社会福祉士、精神保健福祉士等の国家資格を有し、医療現場において社会福祉の立場から患者さんとそのご家族の経済的、社会的、心理的な悩みなどの相談を受け、生活上の問題解決のお手伝いをさせて頂く相談援助職である。

私自身、大学卒業から現在に至るまで社会福祉の現場に携わらせて頂いている。

私がこの仕事をする上で参考になっていることがある。それは「ソーシャルワーカーとは伴走者である」という考え方である。「伴走者」とは視覚障がい者の方のマラソンなどで競技者のそばについて走り、走路や給水所の位置を知らせ、安全に競技が行え、無事にゴールできるように支援する人である。そこには目には見えないが信頼関係が必要となる。私たちソーシャルワーカーにとって大事なことも相談者の方との間に信頼関係を築くことである。

私が派遣されている聖ヨハネ会・桜町病院は地域に密着した病院としてまたカトリック病院として地域住民の方々、また弱い立場におかれているの方々(生活保護、生活困窮、難民、ホームレス等)の診療にあたっている。

相談を受けていると、患者さんが疾病や障がいを抱えつつ日常生活を送る中で「生きづらさ」を感じていることがわかる。しかし、そのような状況にあっても現実的に一步を踏みださなくてはならない。そのときに、私たちMSWに求められるあり方は傍らに寄り添い、その一步を踏み出せるよう共に歩む姿勢が大切だと考える。

本講では、社会福祉士の仕事に進んだきっかけや自分自身の修道生活の召命などにも触れながら医療ソーシャルワーカーの視点を通して、患者さん、ご家族、関係機関との日々の関わりの中で生まれてくる学びややりがいなどをお伝えできればと思う。

【講師プロフィール】漆原 めぐみ (うるしはら めぐみ)

社会福祉士、精神保健福祉士

福音史家聖ヨハネ布教修道会(略:聖ヨハネ会)会員

日本社会事業大学・社会福祉学部、同大学・専門職大学院卒業

大学卒業後、生活指導員として某カトリック青少年施設に勤務

その後、社会福祉法人聖ヨハネ会経営の高齢者施設にて生活相談員として働く。

修道会入会後も引き続き高齢部門、また障がい部門での現場経験を経て、現在は同法人・桜町病院の地域医療連携室で医療ソーシャルワーカーとして勤務している。

【セッション 3】

「かたりば～哲学対話～」

講師：小川 泰治

【要旨】

「明日までにすべき仕事は何か」「この患者に対してどのような治療が可能か」など日々の生活では具体的な答えを要する問題が私たちを悩ませています。その一方で、「何のために生きるのか」「だれかのため」とはどういうことか「私たちはなぜ“信じる”のか」など、簡単に答えの出るものではないけれど、子どもの頃からふとしたときに考えてきたような問いもあります。

本セッションでは「哲学対話」という手法を通して、日々の忙しい生活のなかでは通り過ぎてしまうような問いについてあえて立ち止まりみなさんと一緒にゆっくり、じっくりと考える時間を持ちます。それぞれのグループには哲学対話の経験の豊富なファシリテーターが加わりますが、あくまで議論の整理とシンプルなルールの管理をするのみで、問いを提案し、それを考えるのはみなさん自身です。哲学対話は現在、国内でも教育現場などで取り入れることが始まっているほか、医療・看護の現場で日々具体的な事態に直面する方々のあいだで「ケア」を問い直すためのものとしても注目が集まっています。

「そんな問いは考えても意味がない、それこそ“哲学者”に任せておけばいい」と思われるかもしれません。ですが、はたしてそうでしょうか。むしろそのような問いにこそ、私たちは日々悩んだり、苦しんだり、もがいたり、あるいは純粹に知りたいと思っているのではないのでしょうか。たとえば、「人は何のために生きるのか」という問いには、それぞれの幸福感や生きる目的があり、答えはどれだけ話しても一つには定まらないかもしれません。しかし、だからといって、この問いがどうでもよい問いであるということにはなりません。むしろ、答えが一つに容易に決まらないからこそ、お互いの考えの理由や背景を述べあい、ときに批判的に検討しあうことが可能になり、ときに自分自身のこれまでの考えを問い直すことが、自分を前に進めてくれることもあるでしょう。

本セッションでも一つの問いについてなにか確実な答えにたどり着くことはおそらくないでしょう。むしろ、話す以前よりもよくわからなくなる、という経験を多くされるかもしれません。私たち自身も、私たちの世界も、私たちが思っている以上に複雑な面があります。だからこそ、たくさんの人の考えを聞きながら対話をすることで、ただ漠然とわかっていたことの「わからなさ」について理解が進むこと、また、わかっていたつもりのことが実はよくわかっていたのだとわかるようになること、は私たちにとって確実な前進だと思います。

大切なことは年齢や身分、職業を超えて、お互いが対等な立場で、自分の言葉で、話をしてみることです。ぜひ、わからなさのなかでじっくり立ち止まって考える対話の時間を楽しみましょう。

【講師プロフィール】 小川 泰治（おがわ たいじ）

1989 年生まれ。国立東京工業高等専門学校、東洋高等学校、開智中学・高等学校非常勤講師。上智大学哲学科卒業、早稲田大学大学院文学研究科哲学コース博士後期課程単位取得退学を経て現職。休日には地域で子どもの哲学の実践を行う。分担執筆に『こころのナゾとき 小学1・2年/ 小学3・4年/ 小学5・6年』（成美堂出版、2016 年）など。論文に「子どもの哲学」における対等な尊重（『フィロソフィア』、2017 年）、「子どもの哲学」における知的安全性と真理の探究 — 何を言ってもよい場はいかにして可能か（『現代生命哲学研究』、2017 年）がある。

【セッション 4】

「いのちに仕える」

講師: 竹内 修一

【要旨】

「いのちとは、いったい何だろう」——この直截的な問い掛けに対して、私たちは、戸惑いながらも答えを尋ね求める。それにもかかわらず、いつも、(これで十分)といった答えは与えられない。(なぜだろう)。いのちは、こんなにも自分の中心にありながら、その深みはいつも自分の理解を超えて行く。

いのちの体験——三つのことに気づかされる。まず、自分のいのちは、初めも終わりも与えられたものであるということ。いのちは、与えられるもの(恵み)であって、造り出すもの(生産物)ではない。次に、自分のいのちは、自分のものでありながら、自分だけのものではないということ。そして、すべてのいのちは、唯一の根源(いのちそのもの)から来て、そこへと向かっているということ。もしそうでなければ、この自然界を統べる秩序について、どう説明ができるというのだろう。この秩序を前にして、私たちは、頭を垂れ、沈黙し、^{おそれ}厳かな畏怖を抱く。

ときどき「いのちの尊厳」といった言葉を聞く。だが尊厳とは、いったいどういう意味なのだろう。ふと心に浮かんだ二つの言葉——「かけがえのなさ」と「ありがたさ」。「かけがえのなさ」とは、他のどんなものとも代替できないということ。「ありがたさ」とは、滅多にないということ。きっと、いのちは、ただあるということだけでも意義があるのではないか、とそう思う。

私たちは、他のいのちとの共感・共生・協働なしには生きて行けない。それゆえ、私たちに求められること——それは、自分が出会いのちに寄り添い、互いのいのちに仕え合うということ。それによって、私たちは、初めて真の仕合せへと招かれる。

自分のいのちは他のいのちによって生かされている——それを忘れるとき、人は、傲慢になるだろう。自分のいのちは他のいのちを生かしている——それを忘れるとき、人は、希望を失うだろう。

【講師プロフィール】 竹内 修一 (たけうち おさむ)

カトリック司祭(イエズス会)。上智大学(哲学修士)、Weston Jesuit School of Theology(STL:神学修士)、Jesuit School of Theology at Berkeley(STD:神学博士)。上智大学神学部教授。キリスト教文化研究所所長。専攻:倫理神学(基礎倫理、いのちの倫理、性の倫理)。著書:『【徹底比較】仏教とキリスト教』(共著、大法輪閣、2016年)、『希望——ひとは必ず救われる』(共著、教友社、2016年)、『愛——すべてに勝るもの』(共著、教友社、2015年)、『教会と学校での宗教教育再考』(共著、オリエンズ宗教研究所、2009年)、『ことばの風景』(教友社、2007年)、『風のなごり』(教友社、2004年)、その他。論文:「いのちと平和」(上智大学キリスト教文化研究所『紀要』、2017年)、「いのちに仕え平和を築く」(東京純心大学キリスト教文化研究センター『紀要』、2016年)、その他。